

田辺聖子

花衣

ぬぐや

まつわる

わが愛の杉田久女



花衣
ぬぐや
まつわる

わが愛の杉田久女

田辺聖子

集英社

花衣ぬぐやまつわる……

わが愛の杉田久女

一九八七年二月一〇日 第一刷発行
一九八七年六月二五日 第五刷発行

定価 一六〇〇円

著者 田辺聖子

装画 岡田嘉夫

装丁 安彦勝博

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

〇二 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

出版部 (〇三) 二三八―二八四二

電話 販売部 (〇三) 二三〇―六一七一

製作課 (〇三) 二三八―二九六四

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

花衣ぬぐやまつわる……

目次

序 章

7

第一章 虚子嫌ひ かな女嫌ひ (久女伝説の謎)

——虚子嫌ひかな女嫌ひの単帯

32

第二章 碧 ぎ 潮 (常夏おとめ)

——常夏の碧き潮あびわがそたつ

55

第三章 煙都は冥し (小倉へ)

——目の下の煙都は冥し鯉幟

75

第四章 花 曇 り (自分に賭ける)

——争ひやすくなれる夫婦や花曇り

93

第五章 生くる道わかず (ひとり病む秋)

——個性まげて生くる道わかずホ句の秋

130

第六章 ノラともならず（美しい女弟子）

——足袋つくやノラともならず教師妻

165

第七章 夕顔の髷（俳句にかえる）

——夕顔やひらきかゝりて髷深く

197

第八章 山ほととぎすほしいまま（自由と栄光）

——飮して山ほととぎすほしいまま

232

第九章 無憂華（「花衣」創刊）

——無憂華の木蔭はいづこ仏生会

271

第十章 玉の帯（短冊事件）

——うらゝかや斎き祀れる瓊の帯

315

第十一章 行手いそがむ（序文懇願）

——磯菜摘む行手いそがむいざ子ども

350

第十二章 春の鶴（国子の手紙）

——盆に盛る春菜淡し鶴料理る

377

第十三章 木の実もおちず（同人除名）

——喜べど木の実もおちず鐘涼し

418

第十四章 芽ぐむもの（久女変幻）

——土濡れて久女の庭に芽ぐむもの

457

第十五章 金色の雲（虚子蹈晦）

——鶴舞ふや日は金色の雲を得て

479

終章

505

あとがき

512

参考資料文献

花衣ぬぐやまつわる……

わが愛の杉田久女

序 章

うまく見つかるかどうか——という一抹の不安はあったけれど、何となく私は楽観していた。墓地の入口に案内板があるとか、もしかしたら矢印の指示標が立っているかもしれない——〈杉田久女〉という名高い女流俳人の墓が（正しくは分骨されたものだが）信州の松本にあるということを、あるいは松本の町自体が誇りにして、

〈杉田久女の墓〉

などと指示し、そのかたわらには、彼女の簡単な略歴（それは栄光と悲慘がだんだんに手綱染めされている）をしるした立札があるかもしれないと空想したりした。

この展墓の旅にたずさえてきたのは、増田連氏の『杉田久女ノート』（昭53裏山書房刊）である。いまのところ、杉田久女研究書としては、久女の長女でいられる石昌子さんの書かれたもののほかに、この書が唯一の、よくまとまった労作である。篤実に足を使って調査されていて、この松本市の

久女の墓についてもすでに一九六九年に詣っておられ、文中に、

「広大な敷地をもつ城山墓地の中から、渺たるへ久女の墓」を探したのは、はじめての方では困難かも知れない」

と注意されている。

しかし、地元の人、誰かは示唆してくれるだろう、手がかりはあるだろう、と私は思った。それにしても、あの杉田久女が、信州に関係ふかいは思いもそめぬことだった。久女の父の赤堀廉蔵は、松本市の出身だったのである。

へあずさ七号で新宿を十時に発ったので、松本へ着いたのはまだ日も高い午すぎだった。

十月なかばでよく晴れて暖い。松本駅を出ると、駅前の喧騒ですら、関西よりはるかに透明感があり、空は高く、眉に迫るほど清麗な山々がみえる。

関西人の常として私も信州に強い思い入れがある。その気候といい風物といい、肌と心を洗われるような気がする。これは関西の、猥雑で如才ない、狎れ狎れしい雰囲気です。育ったものでないと、理解してもらえないかもしれない。古い歴史の血のよどんだ関西の風土はなまあたかい体臭にむれている。懶惰・放逸をそそのかす居心地よさ、けちで欲深で破廉恥で、そのくせ陽気で闊達で俊敏で、親切なような薄情なような……。

そういう土地からくるとまさに信州は正反対の気がする。関西は山すらも稜線が丸みをおび、おだやかに眼目しているようだが、信州の山の稜線は鋭く険しい。空気も人のハラワタも透明で、物がなしいほどまじめにみえる。

杉田久女は信州に住みついたわけではないが、生涯、父の任地・夫の任地のあちこちを漂い、

「今迄歩いた中では父祖の故郷信州松本辺が一番頭にのこってゐる」

とエッセー「吾が趣味」の中でいっている。

「甲州から信濃の国へ入ると、急に水量も多く、樹は茂り、山はすぐれて美しく、桑畠や屋根に石を

のせた農家、さうしたものに何ともいへぬ情趣がある。殊に、白いなつめの花と、宝石の様な紺青色の紫陽花と山霧の浅間の温泉宿。旭にぬれ輝く金色の桑の海。軒近く這ひ茂る葡萄やかんびょうにする夕白の白い花。林檎島、まゆ棚の見える家々の窓。さういふものを背景とした美しいアルプスの連峰の色、雲の変化。全くお国自慢のやうであるが信濃の山と、あの山国の清澄な空と山の色はほかでは到底見る事の出来ない特殊な美しさをもつてゐる」

久女は絵心のあつた人だけに、その作句にも視覚的な美しさがあるのだが、この文章なども、そのまま、水彩画のようである。

まだ絵の具の水も乾いていないような、ぬれぬれとした画面、それもその絵はどことなし、田舎の優等女学生のものしたものの、……というやうなおもむきがある。稚拙や野暮というのでなしに、自然に対する素直な憧憬や畏怖が、無作為にあふれているといった感じである。久女の文章は、俳句にくらべると無技巧で素朴でゴツゴツしているが、それが好もしき信州を語るとき、いっそう言葉の角々が立つて擦過熱を帯びたように熱っぽい。

久女は北九州の小倉に長く住んだが、私が関西から信州を思う以上に、久女の〈信濃恋い〉の思いは強かつたろう。

ともかく、そういう松本へ私はきたのだ。同行者は女性編集者のMさんと、女性カメラマンのSさんだった。

あらかじめMさんが、増田氏に電話で、だいたいの場所をうかがっていたが、駅前のタクシーで城山墓地というところ、すぐ走り出した。途中、花と線香を小さいスーパで求める。ぜいたくな花は売っていない、菊やコスモス、藤ばかりといった、道ばたや家の庭で咲いている花々をあつめたやうな、地

味な花束になった。しかしそれも野の草々を愛した久女にはふさわしいかもしれない。

市の中心からそれた静かな一画に、広大な城山墓地はある。紅葉はやや色づきかけたという頃おい、サルビアが墓地の手前にむらがって咲いているが、墓地はまだ夏のように草が繁って、森閑としていた。

もと陸軍墓地だったのを終戦後、市に払い下げられたというのだが、奥へゆくほど深くなり、どこから手をつけていいものやら、標示などは無論あるはずもなかった。

へ丸ノ内中学校のグラウンドの下、というふうに聞いていたのですが、と運転手さんにいったら、中学校はこの墓地の向うに地続きにあり、城山墓地といえはここのことだという。

人は一人も通っていない、柿がたわわに熟れているばかりだった。久女には信濃で詠んだいい句が多いが、なかにも

紫陽花に秋冷^{しゅうれい}いたる信濃かな

という佳品がある。しかしこの日の信濃はかんかん照りの青空で、草いきれの中を踏み分け、両側の墓をさがしてゆくと汗ばむほどだった。久女の実家は「赤堀」姓で、一族の墓が固まってあるはずだから、

「赤堀家」

とある墓石をさがそう、と手分けして墓地の奥ふかくわけて入った。その一隅にあるという

〈久女之墓〉

という碑面の字は、彼女の恩師、高浜^{きよし}虚子^{こし}が書いたという。『杉田久女句集』（昭44角川書店刊）のあとがきに、娘の石昌子^{いさな}さんはこういう。

「松本は、母の実父の出身地で、その父が、アルプスの見える故郷を愛し、墓もそこを希望したのであった。両親の墓の傍に母（久女）も眠った。墓と言っても分骨ではあるし、赤堀氏の墓地なので、ただ『久女之墓』とのみ標してある。文字は虚子先生にお願ひして書いて戴いた。先生は他の人なら書かないところだが、と申され特に書いて下さった。力の籠った書として味わいのある、厚味と奥行の深い、非常に立派な文字であった」

その〈久女之墓〉を建てたのは夫の杉田^{すぎた}宇内^{うち}のはからいであったという。この夫婦は軋轢^{あつれき}と摩擦にその半生を終始し、ついに心が溶け合うことなく終ったかにみえる。久女はその上に、師の虚子から破門され、さまざまの心労に追いつめられて、俗説では〈狂死〉した、ということになっているのだが、宇内は妻の死後、妻の遺骨の一部を、実家の墓に入れてやっている。それは宇内の、男の愛情ではないのだろうか。

そんなことを思いつつ、無限につづくような墓石の列のあいだを歩いていたのだが、昼間といっても森閑たる墓地の中をさまよっているのは気持のいいものではなかった。それに〈久女〉が次第に遠くなってゆく気がする。この死者の大海に〈渺たる〉久女の魂は埋れはてしまったような気がする……。

へとても捜しきれません。この近くにきつとお寺があると思いますから、そこで聞いてみましょう」とMさんが提案した。

その結果、城山墓地はここだけではなくて、もっと古いほうのもそう呼ぶ、とわかった。この町に何十年も住むという、タクシーの運転手さんも、それは知らなかったそうだ。

もういちど丸ノ内中学校前へ車で引き返し、道を折れたとたんに、家と家のあいだに墓地らしい風景が一瞬みえたが、たちまちそれは家並みに遮られ、消えてしまう。再び迂回して車を走らせてみるが、また見えなくなる。

墓地への入口がみつからないのだ。まるで幻の墓地だった。増田連氏が訪れられてから、更に宅地化がすすんで、墓地をとりかこんでしまったのだろう。とうとう車を捨て、民家の裏手の畑を踏み歩いて墓地へたどりついた。ここはさっきの墓地よりずっと狭小で、これなら、しらみつぶしに一基ずつ見ていっても時間はとらないように思われる。墓地の入口は果して中学校のグラウンドと道路をへだててあった。入口の標示の石の門は、つき当りの建材店のかげでわかりにくいのだった。ここは、町の人々には「グラウンドの東の墓地」と呼ばれているそうである。

周囲のぎりぎりの際まで家が建てこみ、人狎れた和やかな墓地の風情である。そのうち、MさんとSさんが同時に、

へありました！

と叫んだ。赤堀家の墓が何基か建てられている。「久女之墓」はもっとも端にあり、その横手は石垣で、その上には民家があり、洗濯物がひるがえっていたが、それも里近い気安さでよかった。

そのそばへ寄るにも、墓と墓のあいだに道がない。よその墓や卒塔婆を踏みそうになって、からくもその間の草を分け分け、注意ぶかく歩をひろいつつ近づく。

「久女之墓」は私の腰までぐらいの、ささやかな、三段の黒御影石である。石昌子さんのいう通り、

量感のあるいい字だった。

(久女さん、こんなところにいらしたんですか)

というような気持で、私は墓を撫でた。何の木か、黒い実をつけた木が背後に掩いかぶさるように立っているが、墓地は明るい。左手の崖には山葡萄が這い、ふり向くと、家々のはざまに、まさに日本アルプスの山々がみえた。真ッ蒼の空を背景に、鋭い稜線は雪にふちどられていた。

久女の墓のとなりは更に小さい墓——久女の末弟で、六つの年に死んだ信光のそれがあり、その隣が両親の墓で、これは大きい。ほとんど私の背丈ほどもあった。

赤堀廉蔵

妻 さよ 之墓

久女を同胞きょうだいじゅうで一ばん可愛がったという父の廉蔵は従六位勲六等、大正七年(一九一八)十二月七日に歿している。久女が二十九のときだった。結婚生活に破綻していた久女は、へ父が生きていてくれたら……とその後、何年も思いつづける。

野菊はや咲いて露けし墓参道

墓の前の土に折りさす野菊かな

と、久女は父の墓まいりをして詠む。母さよを喪ったのは久女が五十五のときだったが、不幸な娘にそそぐ母の慈悲に、久女はいつまでも甘え、心のよりどころにしていたらしい。

手づくりの苺食べよと宣^のらす母

並びきく母耳うとし河鹿きく

昭和八年（一九三三）の五月の久女の日記には

「歳事記の用事も終りたれば、宝塚に八十の母をとふ。四年振り也。赤堀家の長男結婚式に参列のため也。母喜びたまふ事限りなし。

二十日帰倉。（田辺註・久女は当時も小倉に住んでいた）大阪駅頭におくりこられし八十の母君、小さき夏羽織。二十円下さった。母よまさきくおはしませ」

このころは久女は四十四になっている。「ホトトギス」雑誌巻頭となり、創作意欲もさかんな時代であったが、いつも貧に責められ、「しみじみ死をおもふ日もあれど」とか「はりもない、たのしみもない、愛もない生活」という文字が日記に見える。「淋しけれど子の為め生きねばならぬ」「只子を恋^いい、俳句のみ」——そういう日常に、八十の母は「二十円下さった」のであった。久女は大慈大悲の両親のそばにねむっていることになる。

更にその両親のとなりの一基は、昭和四年に歿した次兄の赤堀忠雄のものである。法名へ真如院釈月蟾^{げつせん}」

この兄が久女に俳句の手ほどきをしたのであって、月蟾は俳号である。へ昭和四年四月四日、行年五十歳、彼は久女の次兄に当るが、久女の「年譜」によると大正五年（一九一六）久女二十七歳のとき、「次兄・月蟾の手びきにより句作をはじめ」と書かれてある。そのいきさつは彼女の数少ない小説のうちの一つ、「河畔に棲みて」にくわしい。東京で職と家庭を失い、失意の身を九州の妹・